

書 評

小林隆児 (著)

「発達障碍の精神療法—あまのじゃくと関係発達臨床—」

2016年 A5判 206頁 創元社 2,800円+税  
ISBN 978-4-422-11619-8

序を読んで「これはただものではない」と身構え、理論編の第二章まで読み進むと「ガツンとやられた」と思い、実践編はひたすら頷きながら読み進んで、あつという間に読み終えた。読後にはすぐにでもアンビヴァレンスの概念を自分の臨床に応用したいという衝動にかられた。

アンビヴァレンスという言葉は確かに思春期の説明困難な行動の解釈には使ってきたが、関係性臨床への応用や発達障碍そのものの説明については明確な意義を感じていなかった。薄ぼんやりと感じていたのかもしれないが、意識はしてなかっただけに、言われてみれば、その通りであり、全くなるほどである。

かつて、親子の関係性、支援者と被支援者の関係性など薄ぼんやりとイメージしながら手探りで発達臨床を試行錯誤していた駆け出しの発達小児科医の頃に、乳幼児医学・心理学会で関係性臨床、間主観性などの目新しく説得力のある用語を駆使する著者の話をきいてガツンときたことを思いだした。

実践編では、アンビヴァレンスを治療へ応用すべく17例の詳細な治療経過が年齢順に示されている。発達障碍の本質を原因論的に掘り下げるのではなく、アンビヴァレンスと名づけて棚上げにすることによって、混沌とした状況に枠組みを与えることができることが示された。一旦枠組みが出来ると、肯定的な解釈を試みる事が可能になる。現状の肯定が出来ると親や本人は内省する余裕を獲得することができ、親や本

人自身の育ちの困難さを育児の困難さや今の生き難さに投影させ自責の軽減をはかることに成功するのである。肯定的解釈は発達臨床では不可欠な視点だと考える。著者は臨床の場面ではアンビヴァレンスという言葉は一切用いず、代わりに「あまのじゃく」「へそまがり」「ないものねだり」という優しい言葉を絶妙なタイミングで親、本人に提供している。その結果、親や本人は自身のかかえるアンビヴァレンスを肯定的に整理することが出来、同時に治療者に「わかってもらえた感」を感じることが出来るようになっていくのである。ここで示される「エヴィデンス」は今後進むべき方向と方略を親や本人に提供できるだけでなく、治療者にも向かうべき方向性を示唆している。

発達障碍臨床はかつてない程衆目を浴びているが、症状のスコア化や発達検査の結果に偏重し、目の前の子どもや親の行動観察が十分になされないまま、発達障碍診断だけが生産されていく現状は危惧するに値する。少しでも子どもや親の行動から発達障碍といわれる表現型の背景に存在する本質を見極めようとする臨床家にとって、本書は目からウロコに違いない。アンビヴァレンスという枠組みを使うことで、治療介入する手がかりが見えてくるのである。筆者は発達障碍そのものが治療の対象ではないと考えている。発達障碍という了解困難な状態に対して、納得理解が困難なだけにそれにかかわる親や支援者は混乱を起しやすく試行錯誤を繰り返

返すことになる。試行錯誤により解決できる課題もあるが、様々な問題が副次的に現れてくることも少なくない。この副次的な問題こそが発達障害を障害にする本質であり、治療介入が必要かつ有効な領域だと考えている。アンビヴァレンスという枠組みは親や支援者がかかえるこの副次的な問題への介入を可能にし、結果的に発達障害のある本人の生き難さの軽減にも繋がるように思えてくる。

著者は親子の関係性を意識した治療戦略を示しつつ、患者-治療者の関係性にも話を展開し

ている。子どもを詳細に分析的にみるが親の特性には無関心で、無意識に完璧な親機能を要求する発達支援や、治療者の特性に配慮しない治療マニュアルが闊歩する現状で、治療者を一人称で語る著者の治療法の提案は、多くの臨床家にとって指針を示すだけでなくある種の安堵感をもって迎えられざるはずである。臨床家を自負される方には是非お薦めの1冊である。

(医療法人テレサ会

西川医院発達診療部：林 隆)